

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』に代表される物語の ジャック・ラカンの読解 —「新精神」「溶ける魚32」『ナジャ』を 「想像界」「象徴界」「現実界」で読み解く—

加 藤 彰 彦

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』をジャック・ラカンのように読解するというのが本論考の最終の目的であるが、その前段階として、『ナジャ』を予告させる「新精神」と『溶ける魚』の中のテキスト32をラカンのように読解することによって、その流れで『ナジャ』を分析していく方法を採用した。またラカンの精神分析でこの論考において使用した概念は「想像界」「象徴界」「現実界」であり、特に「現実界」は対象aとともに重要視した。まず「新精神」であるが、ここで問題になるのが謎の女性が存在したという事実であり、それをいかにして事実として認識したかという方法である。単なる主観ではなく、複数による共同主観性から事実として認識されるのであるが、謎の女性という捉え方は結局のところ幻想にすぎない点を指摘した。次に「溶ける魚32」であるが、ここにあるものはブルトンの欲望のみであり、精神分析的にはそれが実体として捉えられる。ここで明らかになるブルトンの欲望とは、他者の欲望を自らの欲望とする想像的同一化ではなく、自らを大文字の他者の視点で捉えるという象徴的同一化である。そして最後に『ナジャ』であるが、まずナジャという女性が現実存在したという事実関係をテキスト並びに研究資料から明らかにした。その上で、ナジャという女性の存在は明らかではあるが、いわゆるシュルレアリスム精神の具現化といった存在ではなく、それはブルトンの幻想が付与されたものにすぎないということ、「私とは誰か」というブルトン自身の問いかけに示されているようにブルトンは何を望んでいたのかと言え、それは大文字の他者の視点を得ることであったということ、その視点を得るために必要な言葉としてシュルレアリスム＝ナジャ＝無意識があったということ、そのような視点を得ることで主観性を確立できるということ、そして以上のことは何ら根拠のない幻想ではなく、パリという現実に基づいたものであることを明らかにした。これらのことから「私とは誰か」という問いに対する答えとして「私はブルトンである」、つまりブルトンはブルトン自身を演じることによってブルトンたり得ていると結論付けた。

キーワード：「新精神」、『溶ける魚』、『ナジャ』、想像界、象徴界、現実界

序章

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』をジャック・ラカンを使って読み解くことの有効性は、『ナジャ』の本編が「私とは誰か。」(PI p.647)に始まり、「君が誰と交際しているか言ってみ給え

そうすれば私は君が誰であるかを言おう。」(PI p.1523) という諺を持ち出してきていることから、ラカンの鏡像段階を用いて理解すること、そして更にナジャとの出会いを10月4日から12日までの日記風に描写した後の反省的記述において「この死に物狂いの追求」(PI p.714) という表現を用いていることから、ラカンの対象aを連想させることによって簡単に証明されるように思われる。ところがブルトンがブルトンであるためにその人物になろうとしているのはナジャではないし、またナジャが対象aとして捉えられると断定してしまうこともいささか荒っぽい扱いのように思われる。このあたりをより精確に詳細に分析していくための方法として、ブルトンによって書かれた『ナジャ』を予言させるような作品を通して比較検討することにより、『ナジャ』をラカン的に読解することが本論考の目的である。その作品とは二つあり、一つめは1922年3月『文学』新シリーズの第1号に掲載されている「新精神」である。これは作品と呼ぶには短いテキストであるわけだが、ナジャとの出会いを予感させるようなものである。更に重要であるのは、『ナジャ』においてこの「新精神」が問題になっているということである。『ナジャ』はナジャの物語が中心になっているわけだが、更にその中心部分というのは10月4日から12日までのブルトンとナジャの関わりを記述している部分なのだが、その10月6日の記述においてブルトンは次のように書いている。「私は彼女に出会った時私が彼女に貸した『失われた足跡』を一冊彼女が手に持っているのに気付いた。それは今テーブルの上にあり、その小口をちらっと見ると、数頁だけしか切られていないことに気付く。見てみると、それは「新精神」と題された小文の頁だ。そこにはある日、数分の間隔で、ルイ・アラゴンによって、アンドレ・ドランによってそして私によって為された、強く印象付ける出会いがまさしく詳細に語られている。我々の各々がその状況において示していた優柔不断、そのすぐ後に、同じテーブルで、我々は関わりあったばかりのことを理解しようとした時の困惑、歩道から歩道へと通行人たちに尋ね歩いている魅力的な若い女性の顔つきをしたこの真のスフィンクス、我々については次々と免れさせていたこのスフィンクスが我々の目の前に現われたいくつかの地点そのものに立ち戻り、そして彼女を探しに、非常に気まぐれでさえあるが、これらの地点を結びつけることのできるあらゆる線に沿って駆けずり回る (下線原文) よう我々、アラゴンと私を導いた抗し難い誘惑——流れた時間が望みなきものにしたとしか言いようのないこの追跡の結果の失敗、ナジャがすぐに関心を抱いたのはそれなのだ。」(PI p.691)

『ナジャ』とは違って小文であるために、必要な要素がより明らかに見て取れるであろう目算を働かせることができる。『ナジャ』が生まれるためには、恐らくこの「新精神」において書かれている出来事が必要であったのだと推測することができる。次に『ナジャ』の理解に有効に作用すると思われるのは、1924年に『シュルレアリスム宣言』に付して自動記述のテキストとして刊行された『溶ける魚』であり、問題とすべきはその中のテキスト32である。(以下において「溶ける魚32」と記す。)「溶ける魚32」に登場する女性はソランジュという名で、ちなみにフランス語で表記するとSolangeつまりSol-angeからSeul-angeの連想で「唯一の天使」と理解されるわけであるが、このソランジュは『ナジャ』において登場することになるのである。ブルトンは『ナジャ』においてナジャの物語を書き始める前にいくつかの不可思議な体験を挿話として書き記しているが、その中にフォンテーヌ通りにある「双面劇場」で見た奇妙な芝居

を紹介している。その内容は『ナジャ』とは直接関係ないように思われるが、その中に登場する女主人公の名前がソランジュなのである。それはただ単に名前が同じであるということに留まらない。ブルトンは芝居自体よりもこの登場人物に関心を寄せているのであって、ブルトンは次のように書いているのだ。「その役は当時の最も素晴らしくそして恐らくは唯一の（下線原文）女優によって果たされたのであり、私は〈双面劇場〉では他のいくつかの芝居で演じるのを見たことがあり彼女は相変わらず美しかったのだが、しかし恐らく私にとっては大いに恥ずべきことだが、彼女についてブランシュ・デルヴァルと話されるのを最早聞いたことがなかったということだけ付け加えておこう。」（PI p.673）

この最後の部分はよくわからないところがあるのだが、このことについてブルトンは自覚的であって、注の部分で次のように付け加えている。つまり「私は何が言いたかったのか。私は彼女に近付いて、是が非でも彼女が実際にそうであった現実の女性（下線原文）のペールを取ろうと試みるべきであったらうということだ。」（PI p.673）

これだけであるとただ単にお気に入りの女優賛美に終わってしまうだろうが、マルグリット・ボネの研究によると（PI p.1536）、ある証言では実はブランシュ・デルヴァルこそナジャであるとのことである。ブランシュ・デルヴァルは本名をウジェニー・マリ・パスキエと言う。マルセル・マリアンが1975年2月に発表した「ナジャの死」という文章によると、ブリュッセルの出版者であり編集者でもあったマルセル・ディウの証言として、ナジャはブランシュ・デルヴァルであって、自分の妻は彼女の姪にあたるとのことである。また『ベルギーにおけるシュルレアリスムアンソロジー』の作者であるクリスチャン・ビュシーは1966年9月15日にブランシュ・デルヴァルは、自分がナジャであると言ったと明らかにしている。ブランシュ・デルヴァルはマルグリット・ボネの研究によると（PI p.1536）、1922年の終わりまで双面劇場の芝居に定期的に出演していたということである。ブルトンはこの芝居を何度か見ているようなのだが、その芝居を見た正確な日付は明らかになっていない。マルグリット・ボネの研究によるならば（PI p.1536）、既に指摘したように1922年の終わりまでブランシュ・デルヴァルは双面劇場の芝居に出ていたということであるから、当然それよりも前に問題となっている芝居をブルトンが見たことは明らかである。一方で『溶ける魚』は『シュルレアリスム宣言』とともに1924年に刊行されたのであるが、テキストを個々に見ていくなら、今問題にしている「溶ける魚32」は自動記述のテキストとされている『溶ける魚』の中にあって唯一自動記述を用いずに書かれたものであって、他のテキストとは別に1922年5月1日の新シリーズの『文学』第3号に「赤い帽子の年」と題して刊行されているのである（PI p.1392）。従って芝居と「溶ける魚32」のテキストの正確な前後関係は明らかではないが、影響関係を充分指摘し得る可能性はあると思う。またブルトンが1922年5月4日に自分の妻であるシモーヌに宛てた手紙には、この「溶ける魚32」となるテキストが長編小説であるかのように捉えられていることが書かれている（PI p.1392）。草稿の段階では実際に刊行されたものより長いものであったようで、まさに長編小説らしく書かれていたということが見て取れる。以上のことから「溶ける魚32」が『ナジャ』の原型をなすものと捉える相当の根拠があると理解されるであろう。実際の構想と執筆時期、更には刊行された日にはそれなりのずれがあり、書かれるよりもはるか前から構想されていた

とすることも充分可能なのであるが、雑誌掲載を基準にして考えるならば、「新精神」が1922年3月、「溶ける魚32」が1922年5月、そして『ナジャ』は1928年5月ということで、この順で考えていくことができるだろう。

第一部 「新精神」

第一章 何が現実として存在しているのか

「新精神」は既に指摘したように、1922年3月の『文学』の新シリーズの第1号に発表されたもので、現在では『失われた足跡』の中に収められている。ちなみにこの『失われた足跡』の初版が出たのが1924年の2月5日で、『シュルレアリスム宣言』の刊行に先立つこと8か月で、ブルトンのシュルレアリスムに関する考えだけでなく、ブルトン個人の思想形成を見て取ることのできるテキストとして位置付けられている。問題となっている「新精神」だが、我々が参照しているガリマール版によれば、257頁から258頁までという2頁の短さである。我々はこの小文を「新精神」と訳し論じることになるのだが、これは日本語で書かれたものの表記がそのようになっているためそれに従ったということであり、原題はL'ESPRIT NOUVEAUであるから、espritを「理念」「基本的精神」と捉えたり、「霊」「幽霊」「精霊」「妖精」と捉えることも可能であることから、テキストの中で問題とされる女性を指して「新しい妖精」としていると理解することもできる。この小文は「1月16日月曜日、5時10分に、ルイ・アラゴンはボナパルト通りを上がっていたが、その時彼は反対の方向からベージュと茶色の格子縞のテラード・スーツを着てその服と同じ布地のトーク帽を被った若い女性がやって来るのを見た。」(PI p.257)という文で始まる。この女性については、アラゴンがブルトンと待ち合わせていたカフェ〈ドゥ・マゴ〉で落ち合った時、まずブルトンの方から切り出したのだ。二人はこの女性について話すのだが、この二人の話を聞いていないアンドレ・ドランがやって来て、問題となっている女性について話し始めたのだった。つまりアラゴン、ブルトン、ドランの三人とも自分が体験したこととしてこの女性のことを話し始めたのである。ところが三人の捉え方は様々であって、同一人物について語っているにも拘らず、受けた印象はかなり違っているようである。例えばアラゴンとブルトンの受け取り方の違いは次のようなものである。「アラゴンは、我々が言ったように、見知らぬ女性の美しさにとりわけ驚かされたようだったし、ブルトンは彼女の非常に礼儀正しい身なりに驚いていて、この点よくわからないが物腰において並外れて墮落した（下線原文）何かを持っていたいかにも〈講義が終わって出てきた若い女の子〉という感じだった。」(PI p.258)

ところがドランの印象はまた違っていて、彼自身の証言は次のようなものである。「その前に、私はこの女性が他の人たちを止めているのを遠くから見ていたし、彼女は私にも話しかけてくるのじゃないかとちょっと待っていたんだ。私はこの辺りで彼女を見たことは一度もないのは確かだし、でも私はこの界隈のあらゆる女の子は知っているんだ。」(PI p.258)

ここで指摘しておかなければならないのは、問題となっている謎の女性についてアラゴン、ブルトン、ドランの三人がその存在を認めているということである。この小文がブルトン自身によるものでありながら、文中において「私」という一人称を用いることなく、自分自身をブ

ルトンと表記し、あたかも客観的視点に立つものであることを明らかにしている、いわばドキュメンタリータッチといったものである。ところがその謎の女性の印象は三人三様であって、果たして同一人物のことを話しているのかと疑わしくなる程である。仮にこれがある個人の体験として書かれていたものであるならば、それは空想か幻想の類にすぎないのではないかという指摘も出来る程である。そもそも空想や幻想と言わずとも、現実の認識において何が現実であるのかについては多くの問題を孕んでいる。この点について我々は、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の中に現われるマルタンヴィルの鐘楼について指摘しておく必要があるだろう。主人公である「私」は医師とともに馬車でコンブレーに戻るのであるが、その途中にマルタンヴィルの鐘楼を見て深い喜びに包まれるのである。これに触発されて「私」は短い文を馬車の中で書きとめるのであるが、それは次のようなものである。「ただそのみが、平原の水準から立ち上がり開けた平野で孤立したかのように、マルタンヴィルの二本の鐘楼が空に向かって高さを増していた。やがて私たちは鐘楼を三本見たのだ。大胆に半回転してそれらの前に身を置きにやって来て、遅れて来た鐘楼、ヴィユヴィックのそれが、それらに合流していたのだ。(中略)次いでヴィユヴィックの鐘楼が離れ、距離を取り、そしてマルタンヴィルの鐘楼だけが、まさにこの距離で、鐘楼の傾斜で私が戯れたり微笑んだりしているのを見ていた夕陽の光に照らされて残っていた。(中略)私たちは道を先に続けた。私たちは少し前から既にマルタンヴィルを離れているそして村は私たちとしばらくは同行した後消えてしまっていて、地平線のところで私たちが逃げ去るのを見ながら、それらだけが残っていたマルタンヴィルとヴィユヴィックの鐘楼は依然として別れの合図として日当たりの良い頂上を揺らしていた。時として一本が消えそのため他の二本がまだしばらくは私たちを見ることができるのだった。しかし道が方向を変えると、鐘楼は金の三本のピボットのように回転して私の目から消え去った。しかし、しばらく後には、私たちは既にコンブレーの近くにいたので、太陽は今沈んでしまっていたけれども、私はそれらを非常に遠くから最後に目にしたのだった。(中略)私たちがギャロップで離れていく間、私はそれらがおずおずと道を探しその高貴な輪郭が何度かぎこちなく傾いた後、互いに身をすり寄せ、互いに前後して次第に傾いていき、最早まだバラ色の空に黒く、魅力的で甘受した形だけしか作らず、そして夜の中に消えるのを見た。」(DS pp.179-180)

ブルーストはこのマルタンヴィルの鐘楼について芸術論的な観点から捉えているように思われるが、我々がここにおいて問題にすべきは鐘楼が果たして現実に何本あるかという客観的に捉えられるととりあえずは言うことができる事柄についてなのである。今我々は客観的という表現を用いたが、事が芸術的観点に依存するものではなく、いわば科学的という領域に属するものであったとしても、客観的という表現はとりあえずのものでしかない。カントの言う物自体が実は存在せず、我々はとりあえずはそのように見えるという現象から出発しなければならないとすれば、それが客観的であるためには、一つの方法としての共同主観性を取り上げなければならない。鐘楼が何本であるかについては、たまたまその状況においてはこのように見えたと言言することが正確な表現であり、それが本当に正しいかどうかはわからないのである。ただ複数の人たちによって確認されれば、それがより客観性に近付くであろうと言うわけであ

る。このことから「新精神」においてブルトンが、アラゴン、ブルトン、ドランの三人の証言をそれぞれ独立したものとして提示しているのは、謎の女性がどのような存在であれ、とにかくこういう女性がいたということは事実であるということを示すためである。これは単なる願望に基づいた空想でも妄想でもなく、まず前提として捉えられるべき現実なのだというわけである。とにかく我々はこのことから、謎の女性は存在するという立場に立つことができる。ただその謎の女性がどのようなものであるかについては既に指摘したように三人三様であって、これこそ主観的領域に属していることであるというのがわかる。とはいいつつも、そこから先がもうひとつよくわからないという事態になる。つまり「アラゴンとブルトンは二人ともこの逃した偶発事件に対して抱いた熱烈な関心を理解するのに大変苦労していた。」(PI p.258)

そこでこの二人はこの謎について考えるよりも、実際謎の女性の正体を明らかにしようとして行動に移すことになるのである。これがこの「新精神」と題する小文の最後であって、次のように書かれている。「6時に、ルイ・アラゴンとアンドレ・ブルトンは謎という言葉を得るのを諦めることができなくて、6区の一部を探索した、しかし無駄だった。」(PI p.258)

5時10分から6時までという1時間足らずの出来事であり、この件についての後日談というものもない。ひょっとしてその後日談に当たるものが『ナジャ』なのではないかとも推測できるが、たとえ単なる推測ではあっても、ブルトン自身この謎の女性について思いを巡らせるという内容の記述が他にあるわけでもない。むしろここで問題にすべきは、謎の女性がいたという事実であり、その女性の存在はブルトンたちをして単なる傍観者として存在させるのではなく、その謎の女性を深く求めさせているということである。つまり謎の女性はブルトンの空想の産物ということではなく、まさに実際に存在したということが重要なのである。そして更に言うなら、実際に存在したことは確かなのであるが、事実アラゴンやドランの証言もあるということなのであるが、今も尚手の届くところにいるのではなく、その正体さえ明らかにしないままどこかに消えてしまったということが重要なのである。

第二章 「想像界」「象徴界」「現実界」

アラゴンとブルトンが謎の女性の正体を突き止めようとして探し回ったところ結局彼女を見つけたことはできなかったというのは、謎の本質に迫ることができなかったという大層なものではなく、彼女が誰であるかを知ることができなかったという単なる事実として存在する。つまり知ろうとすれば知ることができる、手の届くところにあるはずのものが意外にもよくわからないまま放置されるということである。このことはラカンの大前提である、現実そのものは決して捉えることができないということを明らかにしている。しかしだからといってここで全て終わってしまうのではなく、ブルトンにとっては、あるいはアラゴンやドランにとっても謎の女性が一体誰であるのかについては、この後も様々に想像を巡らせるということになるわけであり、ここにおいて想像界が成立することになる。ここで展開されることは大した根拠のない想像にすぎないのであるが、ただ大前提としての謎の女性の存在が揺るぎないものとしてある。このような謎の解明は、例えば推理小説における犯人探しのようなものではなく、むしろ想像を巡らせることが必要であるという考えに基づく。ブルトンは『シュルレアリスム宣言』

において次のように書いている。「想像力を隷属した状態に追い込むことは、たとえそれが大雑把に言って幸福と人が呼ぶようなことを賭けるにしても、奥底に見出す至高の正義に関する全てを怠るということである。唯一想像力のみが私にあり得る（下線原文）ことを報告してくれ、禁じられた恐ろしいことを少し取り立てるのに充分である。」(PI p.312)

そしてその想像力が何について巡らされるかと言えば女性についてであって、これはフェルディナン・アルキエも指摘しているように「ブルトンは幸福を見出したい、そして愛によってそれを見出したいと思う」(PS p.19) からである。しかし結局のところ想像が想像のみに終始しては何の意味もないのであり、どうしても現実には舞い戻らざるを得ない。今指摘したアルキエも「ブルトンが幸福を見出したい、そして愛によってそれを見出したいと思うのは、しかしながらこの世界からであり、そのみにおいてである。」(PS p.19) としている。ところがその謎の女性は確かに現実存在した、存在しているということは事実であるにしても、身近にいるわけでもなく、どこかの誰とわかっているわけでもない。捉えようとして捉えることのできない現実の世界があるわけで、まさに現実界である。そしてこの謎の女性こそラカンの言う対象aである。「新精神」においてはアラゴン、ブルトン、ドランの証言が存在しているわけであるが、果たして謎の女性はこの三人の存在を認めていたのであろうか。つまりここにおいて相互主観性の成立する余地があったのであろうか。例えばアラゴンである。「1月16日月曜日、5時10分に、ルイ・アラゴンはボナパルト通りを上がっていたがその時彼は反対の方向からベージュと茶色の格子縞のテーラード・スーツを着てその服と同じ布地のトーク帽を被った若い女性がやって来るのを見た。比較的温暖な気温にも拘らず彼女はひどく寒がっているように見えていた。コック書店の明かりを利用して、アラゴンは彼女が類稀な美貌で特に彼女の眼が非常に大きいことを確かめた。」(PI p.257)

これだけである。アラゴンは謎の女性を対象として観察していたが、彼女の方がアラゴンを認めたか明らかではない。ブルトンの場合はこうである。「私は驚くべき出会いをしてきたところだ、とブルトンがほとんど座らないうちに彼に言った。ボナパルト通りを再び上がりながら私は絶えず後ろを振り返る若い女の子を追い越したんだ、本当に彼女は誰かを待ってはいなかったけれども。ジャコブ通りの少し手前で、彼女は版画屋のショーウィンドーに興味がある振りをしたんだ、信じられないような、全く不潔この上ない通行人が、彼女に気付いていて、彼女に声をかけるようにだ。彼らは数歩進んで談笑するために立ち止まったけれど、その間私は少し離れたところで立ち止まっていたんだ。少しして彼らは別れその若い女の子は私には更に一層途方に暮れたように見えた。彼女は一瞬振り返り、次に通りを渡っていた平凡な容貌の人を見つけ、突然彼のところに行った。数秒後、彼らは〈クリシー・オデオン〉のバスに飛び乗っていた。私には彼らに追いつく時間がなかったんだ。彼らはバスの乗降口立席にいたけれど通りの少し上のところで、先刻の太った男が後悔に襲われたかのように、身動きしないでいるのに気付いたというわけだ。」(PI pp.257-258)

まさにブルトンの観察記録といったところで、ブルトンの存在に気付いたと思われる箇所が一つもない。そして最後はドランである。「格子縞のスーツだって、と彼は声高に言った、でも私はサン・ジェルマン・デ・ブレの鉄柵の前で彼女に会ったばかりだ。彼女は黒人と一緒だっ

た。彼は笑っていたし私は彼がそっくりそのまま〈ちゃんと変わらなきゃいけないだろう〉と言うのを聞きさえたんだ。その前に、私はこの女性が他の人たちを止めているのを遠くから見ていたし彼女は私にも話しかけてくるのじゃないかとちょっと待っていたんだ。」(PI p.258)

つまりブルトンたちにとって謎の女性とはブルトンたちによって認識される存在ではあっても、ブルトンたちを認識する存在ではなく、あくまで対象としてのみ存在していたわけである。またブルトンたちの努力にも拘らず、その対象は捕らえることもできない存在なのである。しかしそのことが逆にブルトンの欲望をかき立て維持し続けたということは言えるのである。つまりラカンが言うように、求めても得られないが故に夢をかき立てることになるのである。実際その謎の女性の正体がわかった時、それまでと変わらずブルトンはその謎の女性に対して興味や関心を抱き続けることができるだろうか。ブルトンが謎の女性を探し求めるのは彼女の正体、それはあまり直視したくないものであるかもしれないのだが、それを見ずに幻想を抱いているからなのではないか。ここにラカンの言う現実と現実界の違いがある。現実とは対象に対して程よい距離を持って見ることのできるものであり、現実界とは恐らく見たことを後悔するような生まの存在である。謎の女性が謎の女性で留まっている限り、ブルトン自身あるいはアラゴンやドランとともに謎の女性についての想像を巡らせることができる。逆に言うならば、想像の中でこそ謎の女性は存在するのであり、ラカンの「女性は存在しない」という主張に倣って言うなら、本当のところ「謎の女性として捉えられた女性は存在しない」と言えるだろう。そしてこのように考えるならば、ここにおいて生じる空白、つまり謎の女性が現実存在すると思っていたのは単なる想像の産物であり、あくまでその根拠は現実界にある対象aにすぎなかったということで、それまで謎の女性が占めていたところに生じた空白に対して何が存在すべきなのか。言い換えるなら、その空白を埋めるのは何かということで象徴界があるのである。この「新精神」という小文の最後にある「謎という言葉を得ること」(PI p.258)こそが象徴界成立の決め手になると思われるが、ここにおいては明らかではない。「新精神」が書かれたのが1922年の3月であり、ブルトンによって『シュルレアリスム宣言』が書かれるのが1924年であり、2年後のことなのである。シュルレアリスムという言葉を得ることによって、謎の女性の存在、そして更には謎の女性を求めるブルトンたちの追跡行がラカンの言う大文字の他者によって捉えられることになるのである。つまり謎の女性をそれとして捉えているのはブルトンの主観というわけではなく、ブルトンによって見出される前からそしてブルトンが見失ってからも謎の女性が謎の女性として存在するのは、大文字の他者がそれとして捉えているからなのである。この「新精神」という小文だけでは単なる挿話としてのみの意味しかないかもしれないが、後に『ナジャ』が書かれることによって逆に意味を持つことになるのである。つまりこの「新精神」に欠けていると思われる象徴界こそが『ナジャ』において可能になったのではないかという予測をここにおいて持つことができるのである。あるいはその『ナジャ』に至る過程において第二部において論じることになる「溶ける魚32」が書かれる必然性ととともに必要性があったのではないかと考えることができるわけである。

第二部 「溶ける魚32」

第三章 ブルトンの欲望とは何か

「溶ける魚32」においては「新精神」におけるように、現実存在するものが客観的に認識し得る形で提示されていない。要するにテキストにあるものは、ブルトン自身の空想の産物である。自動記述によって書かれたとされている『溶ける魚』であり、原則的にはブルトン自身の無意識が書き記されていると捉えるべきであるだろう。自動記述というその度合については、他のテキストよりも劣るにしてもである。言い方を変えるなら、そこにはブルトンの無意識が書き記されているとまでは言わなくても、ブルトンの欲望が見て取れるということになる。つまりそこにあるものは現実の出来事といった類のものではなく、ブルトン自身の欲望なのである。「溶ける魚32」を「新精神」との比較において捉えるならば、「新精神」においては謎の女性が存在したという事実を指摘することに重きが置かれ、そこからどのような想像が、更には現実において仮に関与することができるなら、どのような関わりがあるかといった期待も明らかにされることがなかった。そしてそれを明らかにしたものが「溶ける魚32」であると捉えることができるだろう。当然のことながら全ては虚構であり、虚構であるからこそブルトンの欲望が明らかになると考えられるわけである。「新精神」においては謎の女性の存在が問題になっていて、我々としてはそこから出発しなければならない。「溶ける魚32」においてそれに該当するものはソランジュである。テキストに則してソランジュについて記述されている箇所を見ていくことにしよう。まずテキストの冒頭は、「私がソランジュと知り合った時私の髪は褐色だった。」(PI p.392)で始まる。ところがテキストはあたかもソランジュがいないかのように、ソランジュとは関係なく書き進められる。そしてまた唐突にソランジュが現われる。テキストでは次のようになっている。「ソランジュが問題になると… 一週間ずっと私たちはある種の燕たちが止まることの不可能性よりも微妙な地域に住んだ。さもないければ別離あるものとして私たちは過去を話すことを自分たちに禁じていた。(中略)私たちはカイエンヌのアルルカンと一緒に、そこでえもいわれぬ程過ぎていくのを忘れる時を生きた。私たちの寝室に通じていた階段の真ん真ん中で、ソランジュは帽子を脱ぎ麦藁に火をつけていたことを言っておかなければならない。私たちの欲望のそれぞれの実現のために呼び鈴のボタンがあったし何をするにも時機があったのだ。ベッドのカバーは手に持った便りで出来ていた。」(PI p.397)

まさに官能的な愛の世界といったところであり、ブルトンにとっては自らの欲望を満たしていると言えるわけである。ところが欲望の実現のためにはこの愛の生活が永遠に続くこともあくまで空想の世界においては可能であっただろうにとも思われるのであるが、あるいはこれこそがまさにブルトンの欲望そのものであったかもしれないのであるが、ソランジュとの関係に変化が現われるのである。確かにラカンの言うように欲望を維持し続けるためには、欲望の実現を絶えず先延ばしにしなければならないのである。例えばそれは宮廷恋愛における貴婦人と騎士との関係において説明されていて、その恋愛は決して成就することがないため、欲望を維持することが出来るのである。ところが「溶ける魚32」のテキストにおいては、ソランジュとの愛はまさに成就してしまっていて、ラカンの考えに従うならば後は欲望が消え去っていくこととなるのである。「9月になろうとしていた。(中略)時折、夜中の12時と1時の間に、ソラ

ソランジュはいなくなっていた。しかし私は朝にはスパンコールで飾ったナイトガウンを着た彼女を再び見出すことを確信していた。私は今尚彼女の睡眠を考えることしかできないし恐らく彼女は私のそばで目覚めることしか決してしないだろう。(中略) ソランジュはいつも舞踏会から帰るように見えた。私たちの関係のものすごい没個性はあらゆる嫉妬を締め出していたので失踪で薄く色のついた大きなコップの水は決して生ぬるくなくなることがなかった。後になってやっと私は白魔術のこれらの有名な芸の異常なまでの無力さを理解したのだった。／私たちの時間の最良のものが過ぎ去ったのは浴室の中のだ。(中略) ある日私は最初に、朝の8時頃、希望を持って、と私は信じているが、私たちを概観し始めていた不可思議な運命を感じ、私の驚きがどんなものであっても、無傷のままでいた窓ガラスが逆に薄く青色であったけれども〈曙〉と言われる色であるこの特殊性を呈していたタイルの落下の音のほとんどすぐ後に続いて起こった翼の大きな音を聞くという何かわからないがこの上ない不安が支配していたこの部屋に入り込んでいた。マッサージベッドの上にはかなりの美貌の女性が横たわっていて私は幸運にも最後の痙攣を偶然見つけてしまったのだが、私が彼女のそばに寄った時には、息をするのを止めていたのだった。(中略) 死んだ女性の息を調べるための方法は、見たように私にはなかった。ソランジュは夜から現われていなかったがこの女性は、靴底が足の指の挿入の線の水準まで、踊り子たちのそのように目に見えない線影を呈している白い小さな短靴を除けば、彼女に似ていなかった。最も軽微な手がかりも私には不足していた。」(PI pp.398-399)

ソランジュとの愛が成就すれば、後は欲望は収束する他ない。仮に欲望を維持しようとするならば、愛の成就を先延ばしにするしかないわけである。あるいはテキストにおいて垣間見えるように、ソランジュとは違った別の女性を出現させるという方法もある。しかし新たに別の女性を、かつてソランジュが占めていた立場に立たせるということにはなっていない。その別の女性とは既に失われてしまった女性として提示されている、あるいは物語としてソランジュとの愛の成就を最後に持って来てそれで物語を終わらせるという方法もあったかもしれない。もちろん物語が終わったその後のことを我々は考えるわけであり、ソランジュとの愛の成就があった以上欲望は維持されることはあり得ないと考えことになるのである。物語としてどのように終わらせるかという問題はあっても、愛の成就が欲望の終息をもたらすということであるならば、ラカンの提示した宮廷恋愛における貴婦人のように愛が成就しない設定にするしかない。しかしブルトンはそのような方法を採用しなかった。つまりブルトンの欲望は愛の成就とは別のところにあったのである。「溶ける魚32」のテキストにおいて、ブルトンは浴室にいた女性をあたかも検分したかのようにして浴室を立ち去る。ちょうどその箇所であるが、それは次のように書かれている。「これらの些細な確認に留めて、私は無駄な用心もせずに出かけた。確かに私に何らかの敬意を起こさせた装飾は、上着の内ポケットの少し下にある裏地に留められたこれらの金の大勲章だけである。」(PI p.399)

ここにおいて「金の大勲章」とは何を意味するのか。これが物語の当初から現われ、話の流れに沿って出てくるものであるならば、シニフィエなきシニフィアンとして機能していて、物語の展開を維持するだけのものとして理解することができるのであるが、この勲章についてはこのテキストの最後においてまさに唐突に現われるのである。それはまさに何かの象徴であら

うと思われるが、ブルトンの欲望の向かうところもこの象徴だったのではないか。「溶ける魚32」のテキストは最早ソランジュのことなど関係ないかのように、全く別の展開を見せる。「有名な現実逃避について凡庸な書物しか書かれていない。(中略)私の検査は数秒しか続かなかったし私は知りたいと思っていたことを知っていたのだ。実際パリの壁は白の半仮面をして顔を隠し左手には野の鍵を持っていた男を描いた貼り紙に覆われていたのだ。その男、それは私だったのだ。」(PI p.399)

ここで問題になってくるのは、テキストのまさに最後においてこの「私」が唐突に前面に出てくるということでもあるし、それ以上に問題であるのは、このパリの壁に貼り巡らされた似顔絵を見ているのは一体誰なのかということなのである。

第四章 「想像界」「象徴界」「現実界」

「溶ける魚32」のテキストはブルトンの欲望に基づいた想像の産物であると言えるだろうが、全てがテキストとして表現されているわけではない。またテキストとして表現されているものだけをもってしても、ブルトンがその言葉に突き動かされているというものも見当たらない。また現実そのものは存在しないにしても、現実界と言えるものはどうなのか。例えば対象aとして捉えるものは存在するだろうか。このように考えた場合、否定しようのない形で存在を指摘できるのが、テキストの最後に現われる「私」であり、そこから当然の如く導き出される他者の存在なのである。ここにおいて「私」とはどのような存在であるのか。別の言い方をすれば、自らの欲望に基づいてあれやこれや想像を巡らせている「私」なのか、あるいは実際にこのテキストを書き記している現実の「私」なのか。サルトルの用語を用いるなら、前者は対自存在であり、後者は即自存在ということになるであろう。このどちらとも判断のつきかねる「私」のあり方とは別に、テキスト上においては明確に示されていないもののまさに他者の存在、それも大文字で書かれる他者の存在である。これはパリの壁に貼り巡らされていた似顔絵を見ているのは誰かということからごく自然に導き出される。『溶ける魚』に描かれる世界はこの日常の現実とは違って、一般の人たちが存在しているような気配はない。従って、パリの壁に貼り巡らされている似顔絵を見ている人たちは一人もいないのではないかという想像も成り立つ程である。実際その情景を想像してみるならば、あたかもシュルレアリスムの絵の中にあるように誰もいない広場を思い浮かべることもできるのである。ところがここにおいて問題になるのは、実際に誰かが見ているかどうかということではない。パリという公けの場所でその壁に似顔絵が貼り巡らされているということで充分なのである。つまりこのことによって大文字の他者がそれを見るということが可能になるのである。そしてこのことからテキストの最後に出てくる「私」とは、対自存在でも即自存在でもなく対他存在であることがわかる。ところでこのような状況を設定することで、ブルトンは自らの欲望の何を実現させようとしたのだろうか。サルトルは対他存在を説明するために、『存在と無』において嫉妬のために他人の部屋の鍵穴から中を覗いている状況を例に挙げている(EN pp.317-319)。確かにあまり好ましいことであるとは言えない状況ではあるのだが、これは誰にも見られずに遂行できるのならば、自らの欲望を満たすということで自分の中ではそれなりに諒解される行為であるのかもしれない

い。ただもしそれが誰かそれも自分を知る誰かによって不意に目撃されたとなると、自らの欲望を満たすことと引き換えに、あるいは自らの欲望を満たすことなく不名誉を引き受けなければならなくなる。この場合理由の如何に拘らず、鍵穴から他人の部屋を覗くということは、自慢できることではないにしても、仮に問題となる事柄が全く別のものであったとしたらどうだろう。ジャック・アラン・ミレーは想像的同一化と象徴的同一化の関係を指摘しているが、我々が他から抜きん出た人物に対して自分もあのようになれば他の人たちからよく思われるだろうということ自分で自分もあのようになりたいと思うのが想像的同一化で、これとは別に本来は好ましくはないが犯罪に手を染めた者に対してその人の置かれていた状況に同情し自分も場合によっては同じようなことをしていたかもしれないとするのが象徴的同一化である。従って想像的同一化において問題になるのは、自分がどうしたいのかという単純な話ではなくて、誰から見て好ましいのかということである。つまり對他存在ということなのであるが、次に問題になるのはその他者とは一体誰であるのかということである。精神分析の例において、ヒステリー患者の女性はある男性、それは恐らく父親であるのだが、父親から見て好ましく見えることを望んでいる。このように考えるならば、『溶ける魚32』のテキストの最後においてパリの壁に自分の似顔絵が貼り巡らされていたということの意味を理解することができるだろう。つまりパリの壁に貼り巡らされている自分の似顔絵を見ている他者とは大文字の他者であり、それは結局のところ自分自身に他ならないわけである。このことは何を意味するか。我々は通常他者によって認められることにより社会的に自らの立場を保持することになる。つまり自分が何であることの前に他者が何を望んでいるかということが問題になるのであり、それを受けて我々はそれに適う形で自分を演じなければならない。『溶ける魚32』のテキストに則して言うなら、『私』はソランジュに受け入れられることによって『私』になる。これを逆に表現するなら、『私』が『私』であるためにはソランジュが必要だったのである。この場合ソランジュから見て『私』というものが成立する。ところがソランジュとの愛の成就によって欲望を維持できなくなった時点において、『私』はソランジュから見てどうであるのかという想像的同一化ではなく、大文字の他者から見てどうなのかという象徴的同一化へと移行するわけである。ここにおいて、つまり象徴的に他者の立場と同一化することによって、他者の欲望がいかなるものであるかを知るのである。それが例えばフロイト＝ラカンの言う「死の欲望」であったとして、それにいかに対応するかということも学ばなければならない。『私』が『私』であるということは自らの欲望を肯定することではなく、他者の欲望から身を守ることなのである。『溶ける魚32』のテキストにおいてソランジュが姿を消した後浴室の中にいた女性は予め死んでいたわけであるが、仮に生きていたとして物語上様々な展開が予想されるため、それをとりあえずは遮断しておく必要もあったのだろう。他者の欲望から身を守り『私』が『私』でいるための一つの方策として「現実逃避＝逃亡」がある。だからこそ『溶ける魚32』のテキストにおいて「有名な現実逃避」が問題となるのである。このように考えるならば『溶ける魚』のテキスト全体がこの「現実逃避＝逃亡」という線によって成立していることが見て取れる。つまりテキスト1において、「建物是我々の逃亡の鐘だ。朝5時の逃亡、その時薄明かりは羊歯のベッドの中で特急列車の美しい女の旅行者たちを悩ませる、殺人のオリーフの中を通過しての午後1時の逃亡。建物はポ

ンバドゥール夫人の影に似た教会の中への我々の逃亡の鐘である。」(PI p.350) テキスト 6 において、「この荒れ果てた海岸に私を導いた足跡は今度はもっと遠く、更にもっと絶望的に遠く私を連れて行くだろう。」(PI p.358) テキスト 26 において、「その時まで我々の苦悩に身をかがめていた星が消滅するのは、未来と名付けられた甘美な逃避、常に可能な逃避の中だ。」(PI p.384) 「私は勇気を持って生存しているのではない。」(PI p.385)

ただしこれらを安易な現実逃避として捉えてはならない。とは言いながらもブルトンは逃亡の果て、どこに向かおうとしているのだろうか。そもそも自らの欲望とは何なのであろうか。我々はここに至って、ラカンを用いながら『ナジャ』を読解していく地点に到達したように思われる。

第三部 『ナジャ』

第五章 現実にあったこと

ブルトンの『ナジャ』は1928年5月25日にガリマール書店より初版が刊行されているが、プロローグの部分が1927年の秋に『コメルス』誌に「ナジャ、第一部」と題して発表され、次いでナジャの物語のうち「新精神」に言及している「10月6日」分がそれに先立って1928年の3月に『シュルレアリスム革命』誌の第8号において発表されている。『ナジャ』においては1962年の全面改訂版において新たに「序言」が加えられ様々な修正も行なわれているが、ナジャの物語を中心にして、シュルレアリスム的な体験を綴ったものが前に置かれ、ナジャの物語以後と言うべき思索的なものが後に置かれるという形になっている。ナジャの物語の更に中心を占めるのがナジャとの出会いを綴ったもので、日記形式になっており10月4日から12日までとなっている。それは実際のテキストにおいて「去年の10月4日」(PI p.683)と記され、注の部分で「それは1926年である。」(PI p.683)と記されている。テキストにおいては10月4日から12日までが比較的详细にそれこそ日を追って記述されているため、この間のみ出会いを重ねていた印象を与えるが、『ナジャ』のテキストからもそれ以後も会っていたことがわかるし、マルグリット・ボネの研究によれば(PI p.1510)、手紙のやりとりなどもあったとされている。ここにおいては、『ナジャ』のテキストとマルグリット・ボネの研究をもとにして大体の事実関係を明らかにしておこう。まずナジャの物語の始まる前の段階でシュルレアリスム的な体験が語られているのであるが、これは1918年から1927年8月までのことである。ただしこれはナジャとは直接関係がない。中心部分を占めるナジャの物語であるが、10月4日から12日の出会いの日記が記されている。また日付はないが、13日にはサン・ジェルマンでの旅行がある。そしてこの後は日記形式での記述はなくなるのだが、全く会っていなかったというわけではない。事実テキストにおいても「私は幾度もナジャと再会した。」(PI p.718)と書かれているのである。もっともナジャの物語としては10月12日もしくは13日において完成され完結していると言うことができるだろう。その後はブルトンによる内省が始まるのである。これは『ナジャ』のテキストにおいて示されていないが、このあたりからナジャからブルトンへの手紙が頻繁になったようである。マルグリット・ボネによると(PI p.1510)、1926年の10月22日から1927年の2月中旬まで27通の手紙ないしは速達郵便があった。『ナジャ』のテキストにも挿入されているナジャ

自身によるデッサンもこのあたりから始まっている。12月1日には自分は忘れられていると不満を漏らし、翌年の1月末には月に2回しか会っていないと嘆いている。1月30日の手紙では、「もしあなたが私を捨てたなら私はもう駄目だと思う。」(PI p.1512)と書いている。1927年の3月21日には幻覚に襲われ、サン・タンヌ病院に移送され、そしてこれは『ナジャ』のテキストにも記されているのだが、3月24日にはヴォクリューズの病院に送られている(PI p.1513)。ナジャはこの病院に1941年1月15日に死ぬまで入っていた。20日の午後に現地で葬儀が行なわれている。

次にナジャの物語の後の部分でブルトンはこの物語を再び捉え直そうとするのだが、その時ブルトンは場所を見直すということをするのだ。我々も場所という観点から『ナジャ』のテキストを捉えてみるならば、主たる舞台はパリであると言うことができる。ナジャの物語が始まる前段階の挿話の部分においても、ブルトンが学生時代をすごしたナントを除いてはパリが中心となっている。我々が場所に注目せざるを得ないのは、ブルトン自身が『ナジャ』のテキストと場所を結びつけて捉えているからに他ならない。つまりブルトンは次のように書いているのだ。「私は出発点として、私が1918年頃住んでいたパンテオン広場の、偉人ホテルを、そして休憩地として1927年の8月に相変わらず同じく断固としているヴァランジュヴィル・シュール・メールのアンゴの館を取ろう」(PI p.653)。

そしてナジャの物語の中心部分である10月4日から12日までについて見るならば、冒頭の部分で次のように書かれている。「去年の10月4日、全く暇で非常に陰鬱な最近のある午後の終わりに、私はそれを過ごす秘訣を持っているので、ラファイエット通りにいたのだ。」(PI p.683)この後オペラ座の方向に歩いていくわけであるが、「私は名前を忘れていないか、そこ、教会の前のこの十字路を横切ったばかりだったのだ。」(PI p.683)

ここでブルトンはナジャと出会うわけであるが、マルグリット・ボネによると(PI p.1542)、この時ブルトンはラファイエット通りを下っていて、ナジャはこの通りをマジヤンタ大通りの方に向かって歩いていたことになる。当時はラファイエット広場、現在ではフランツ・リスト広場と呼ばれている広場にある大きな交差点で出会ったのだ。テキストに出てくる教会とは10区にあるサン・ヴァンサン・ド・ポール教会である。ちなみにこの場所はナジャがリールからやって来て初めてパリで泊まったというスフィンクスホテルが近くにある。ブルトン自身ナジャと出会った後カフェでしばらく話をするようになるが、それは北駅の近くにあり、このスフィンクスホテルも北駅から近くのマジヤンタ大通りにある(PI p.1550)。この後ブルトンとナジャはフォーブール・ボワソニエール通りまで歩いていて、翌日もラファイエット通りとフォーブール・ボワソニエールの交わる角のバーで会うことに決めている。その翌日の10月5日のことだが、ブルトンとナジャが約束の場所で出会い、その後ブルトンの家まで戻ってきて二人が別れる時、ナジャは次のような発言をするのだ。「それで私は、今から。どこに行こうか。でもラファイエット通り、フォーブール・ボワソニエールの方にゆっくりと下りるのは、私たちがいたまきにその場所に戻ることから始めるのはとても簡単だわ。」(PI p.690)

10月6日に、ブルトンはナジャと5時半に落ち合うことになっていたのだが、少し早いめに外に出てショセーダンタン通りを歩いていると、偶然にもナジャに出会うことになる。とりあ

えず近くのカフェに入るのだが、その後一緒に夕食をとるために出向いた先がドーフィヌ広場なのだ。そしてこのドーフィヌ広場についてブルトンは次のように書いている。「ある混同が彼女の心の中に確立されていたに違いなかったというのも彼女は、彼女がそう信じているように、サン＝ルイ島ではなくて、興味深いことだが、『溶ける魚』の別の挿話〈接吻は非常に早く忘れられる〉が設定されているドーフィヌ広場に私たちを案内させているからだ。（このドーフィヌ広場は確かに私の知る限り最もひどく人里離れた場所の一つであり、パリにある最悪の空地の一つである。私がここにいた時はその都度、他の所に行きたいという気持ちが少しずつ私からなくなるのを感じたし、非常に甘美で、あまりにも心地よく執拗で、そして要するに台無しにする重圧から身を引き離すために私自身と議論しなければならなかったのだ。その上、私はこの広場の近くにあるホテル、〈シティ・ホテル〉にしばらくの間住んでいたことがある。（後略））」（PI p.693, p.695）

この後近くでブルトンとナジャは食事をとるのだが、靈感の強いナジャがその辺りに幽霊を見ることになり、恐くなった二人は早々にその場所を離れる。この後ナジャはコンシエルジュリの方に行きたいと言うのだが、そこでナジャは自分がマリー・アントワネットの側近の生まれ変わりであって、ブルトンに対してかつては誰であったのかと問い質すのだ。そして真夜中あたりになって、二人はチュイルリー公園へとやって来る。10月7日、ブルトンはナジャと会う約束をしていなかったし、そのことに後悔するのであるが、たまたま出かけた時に、サン＝ジョルジュ通りで偶然にもナジャと出会うことになる。10月8日にブルトンはナジャに会うことが出来なかったのだが、10月9日に会った時、8日は会う場所を間違えていたことに気付く。10月10日「私たちはマラケ河岸、レストラン・ドゥラボルドで夕食をとっている。」（PI p.705）

10月11日、「私たちはお互いそばにいますが、かなり別個に通りから通りへとあてどなく散歩する。」（PI p.710）

10月12日、ブルトンとナジャは夕食の後パレ・ロワイヤル庭園を歩いているのだが、このあたりからブルトンにはナジャが理解できなくなってくる。「気分転換として、私は私たちがパリを離れたらと提案する。サン＝ラザール駅、サン＝ジェルマン行きなのだが、列車は私たちの目の前で出発する。（中略）我々は次の列車を待たざるを得ない、それが我々を1時頃サン＝ジェルマンで降ろしてくれるだろう。」（PI pp.713-714）

日付は明記されていないが、サン＝ジェルマンでの出来事は13日である。以上のように見てくれば、ブルトンとナジャとの関わりを中心的な部分は時期的には1926年の10月4日から12日までであり、パリという場所に密接に結びついていることが理解されるだろう。このことについては後の章において再び論じることになる。

第六章 ナジャとはブルトンの幻想の産物か

我々は通常ナジャをシュルレアリスム精神の具現化された存在とみなしているが、果たしてそうか。まず第一章において問題にしたように、共同主観性の観点からナジャの存在について見直すことから始めよう。もっとも『ナジャ』に関して言うならば、「序言」において明記されているように、ブルトンは「医学的、とりわけ神経精神医学的観察」（PI p.645）を念頭に置

いて『ナジャ』を書いているわけであり、この場合ブルトンは医者立場に立つということを考えるならば、どうしてもブルトンによる観察記録といった体裁になることはやむを得ないと思われる。それでもナジャは現実の存在としてブルトン以外の他者に捉えられていたわけであるから、そのあたりから辿って行くことになるだろう。ナジャの物語の前段階のシュルレアリスムの体験の挿話の部分においても触れられているが、ブルトンはシュルレアリスム本部に出向きシュルレアリスム運動のメンバーたちとの関わりも様々にあったと思われるが、ならば他のメンバーたちにナジャの存在も認識されていたのではないかということが言える。つまり他のメンバーはナジャをどのように捉えていたかということである。ところがそのような箇所は少なくとも『ナジャ』のテキストにおいてはあまり見当たらない。10月7日の記述において次のような箇所がある。「私は3時頃私の妻と一人の女友達と一緒に出かける。タクシーの中で私たちは昼食の間そうしていたように、彼女について話し続ける。」(PI p.701)

ところがブルトン以外の人たちがナジャのことをどう思っていたかについては全く書かれていないのだ。また10月12日の冒頭の記述は次のようになっている。「私が彼女の話を話したマックス・エルンスト、彼はナジャの肖像画を描くことを受け入れるだろうか。サッコ夫人は、と彼は私に言うのだが、途中でナディアとかナターシャとかいう名の女性に会ったのだが彼女の話を彼は愛さないだろうし——これはほとんど彼女の表現なのだが——彼が愛する女性に対して身体的苦痛を引き起こすだろうというのだ。この禁忌は我々にとっては充分であるように思われる。」(PI p.710)

直接ナジャに言及したものではないにしても、ナジャとはあまり関わらない方がいいという意図をもって発言されたのではないかと推測できる程だ。またこれは実際にどのような人物たちなのであるかは全く明確ではないけれども、ブルトンがナジャと距離を取り始め、ナジャが精神に異常をきたし結局のところヴォークリューズの精神病院に入れられた件についての他の人たちの反応を記した箇所は次のようなものである。「私以外の人たちは以前にある全てのことの運命的な結果として彼らには見えているに違いない、この事実について非常に無益なことだが長講釈を述べるだろう。最も経験深い人たちは、私がナジャについて報告したことにおいて、既に精神錯乱の考えに、入れておいた方が適当である役割を急いで探そうとするだろうし、恐らく彼らは彼女の人生における私の介入、これらの考えの敷衍に実際好都合な介入に、ひどく決定的な価値を付与するだろう。〈ああ! いやはや〉〈あなたはよくわかるでしょう〉〈私もそう思っていたんだ〉〈こういう事情だから〉と言うような人たち、程度の低いあらゆる馬鹿者に関することについては、私は何もしないで放っておく方がいいと思っているのは言うまでもない。」(PI p.736)

この件についてはナジャ自身に対してどう思うかというよりもナジャに関わったブルトンの行為を責めているように思われるが、いずれにしてもあまり関与すべき相手ではなかったという認識が他の人たちの中にあることが見て取れる。そして実際このような見方というのはブルトン自身の中にもあって、10月4日から12日までの日記形式で語られるナジャの物語以後の反省的な部分において、ブルトンは「誰が本当のナジャなのか」(PI p.716)という問いかけをしていくつかのナジャ像を提示するのであるが、その中の一つとして次のようなものがある。

「あるいは（何故それを認めないのか）要するに他の人たちは彼女に話しかけることが自分には許されていると信じていて、彼女の中にはあらゆる女性の中で最も貧しい女性そしてあらゆる女性の中で最も無防備な女性しか見ることができないでいたために、時として身を持ち崩していた（下線原文）ナジャなのか。」（PI p.716）

つまり10月4日から12日もしくは13日までの短い期間であり、それ以後も月に2回程度会っていたとはいえ、当初思っていた、つまりある程度距離を置いて見ていたナジャではなくて、間近で見ることになったナジャはまさにブルトンにとって見たくない「現実界」であったのだ。要するにそこにあるのは「現実」ではなくおぞましい程の「現実界」なのだ。それを見たくないとするならばどうするか。見ないことによってそこにあったものが見えなくなる、つまり存在しなくなると、そこに生じた空白をどのようにして埋めていくのか。それこそブルトンの幻想に他ならないわけであるが、幻想と言っても根拠のないものとして片付けることはできない。それは音声なのである。ここにはデリダの批判する音声中心主義の反転が見られるだろう。つまり音声こそが存在することの最後の拠り所となるのである。ナジャの物語が終わりこの本を書き上げるかどうかで思案していたブルトンを支えていたものこそ、音声であるわけだ。つまり『ナジャ』においては次のように書かれている。「そして〈不思議〉、そこにおいてはこの本の最初の頁から最後まで私の信頼が少なくとも変わることがないだろう〈不思議〉によって、もたらされ、誰が知ろう、既に取り戻されてしまっている、最早彼女のものではない一つの名前が私の耳元で鳴らんことを。」（PI p.746）

そもそもブルトンがナジャとの出会いにおいてナジャをシュルレアリスム的な存在であるとみなすことになった時点に立ち戻ってみる必要があるだろう。10月5日においてブルトンはナジャと会った後、家に帰ることにするのだが、ナジャは帰りのタクシーの中まで付いて来るのだ。その中でのことである。「私たちはしばらくの間黙ったままできて、それから彼女は私に突然なれなれしく話す。〈遊びよ、何か言って。目を閉じて何か言って。何でも構わないの、数字とか、名前とか。こんな風に（彼女は目を閉じる）、二つ、何か二つ。二人の女性。その女の人たちはどんな風なの。黒い服を着ている。彼女たちはどこにいるの。公園の中… そして次に、彼女たちは何をしているの。ねえ、すごく簡単よ、何で遊びたくないの。えーっと、私はね、一人でいる時私に話しかけて、私にあらゆる種類の話をするんだけど、こんな風なの。それに無意味な話だけじゃないわ。私が生きているのはまさに完全にこんな流儀なの。〉」（PI p.690）

そしてこれに対してブルトンは注の形で、「ここで人はシュルレアリスムの渴望の限界、その最強の極限理念（下線原文）に到達するのではないか。」（PI p.690）と評価するわけである。だからこそナジャはブルトンにとってシュルレアリスム精神の具現化として存在するということになるわけだが、我々としては少なくともブルトンにとってはそうであったとして断定していいものかどうかためられる。というのもナジャはブルトンの考えに触発されて、ブルトンの望むところに合わせていたのではないかと思われるからだ。10月4日に初めて出会い、話した後、ブルトンが別れを告げようとする、「それから、非常に真面目な、非常に内省的な別の調子に」（PI p.688）変わる。そしてナジャは次のようにブルトンに言うのだ。「でも… そ

れである重要な考えは。私はそれがついさっきとてもよく分かり始めていたの。」(PI p.688)

その後「彼女は私の本を一、二冊読みたいようだし私が心から彼女が持ち得る興味を疑うとそれだけ一層それに執着するだろう。」(PI p.689)

この時点でナジャはブルトンの著書を読んでいないわけであるから、ナジャはブルトンの要望に応えようにもどうしていいかわからない。そのため10月5日に会った当初は「会話はしかしながらより困難になっていて彼女の方では、きまっためらいを伴い始める。」(PI p.689)ということになるのである。ところがブルトンは自分の著作を持って来ていて、ナジャに手渡す。「それは彼女が私の持って来た本をひつつかむ時までである。」(PI p.689)

そして更に10月6日においては、それがより発展する。10月5日にブルトンはナジャに『失われた足跡』と『シュルレアリスム宣言』の二冊を手渡していたのであるが、その『失われた足跡』の中には第一部で問題にした「新精神」が収録されているのである。この時ナジャが「新精神」の中の謎の女性と自らを同一化して考えたとしてもおかしくはない。ただブルトンは何を望んでいるのか、それについては明らかではない。単に出会ったことしか、その事実しか書かれていないからだ。そこで自分はどのような存在になったらいいのか確かめる必要があることから、ナジャはブルトンにその件についての説明を求めるのだ。「この日の短い出来事の物語は私にとっては注釈なしで済ますことが可能だったという事実には彼女は驚いているし失望している。彼女は私がそれに対して何がしかのものを帰している正確な意味について、そして私は忘れてしまっているのだが、私がそれに与えている客観性の度合いについて私に自分の考えを説明するようせきたてる。」(PI p.691)

ブルトンの望む存在になるよう演じなければならないとなると、当然のことであつたろう。しかしそれに対してブルトンは説明することができない。「私はそれについて何も知らない、このような領域においては確認する権利は全て許されていることであると私には思われるし、背信があるとしても、私はこの背信の最初の犠牲者だったのだと答えなければならないが、私は彼女が私を免除してくれていないことがよくわかるし、私は彼女のまなざしの中に焦燥と、それから狼狽を読み取る。恐らく彼女は私が嘘をついていると思っているのではない。結構大きな気詰まりが我々の間を支配し続ける。」(PI p.691, p.693)

つまりブルトンが何を求めているのか明らかにしない以上、ナジャはどのように振る舞っていいかわからないわけであり、そのことはブルトンがナジャのことをそれ程思っていない証拠だとまで思うわけである。ここまで来るとナジャにとって可能なことは、「新精神」において描かれている謎の女性と同一化することだけである。そこで10月10日ナジャは唐突にある種の提案をするのである。つまり自分が「新精神」で謎の女性のことが書かれているようにブルトンによって書かれるようになるという予言にも似た提案である。「それから、突然、私の前に身を置き、ほとんど私を止めながら、人のいない城の中で、部屋から部屋へと、誰かを呼ぶように、私を呼ぶこの異常なやり方で、〈アンドレ。アンドレ…あんたは私についての小説を書くのよ。請け合うわ。駄目だとは言わないで。気をつけてね。全ては弱まり、全ては消えるの。私たちの中で何かが残らなければならないの… (後略)〉」(PI pp.707-708)

ナジャにしてみればどのようにすればいいかの唯一の指針は「新精神」の中の謎の女性しか

いず、彼女についてはその存在だけであり、どのように振る舞っていたかについては明確ではないため、ナジャとして目指すべきはブルトンによって小説に書かれる存在になるということだけだったのである。このように考えるならば、『ナジャ』のテキスト中において示されているナジャの存在はブルトンの願望に色濃く染められていたと言えるだろう。ブルトンがナジャをシュルレアリスム精神の具現化された存在として見たいという欲望よりも前に、ナジャは実際そうではないにも拘らず、ブルトンの欲望に合致するように振る舞っていたのだと考えられるわけである。つまりブルトンの欲望を推し測って、その欲望に応えるようにシュルレアリスム精神の具現化であるかのように振る舞っていたナジャに対して、ブルトンはシュルレアリスム精神の具現化を見て取るという二重構造になっているわけである。要するにシュルレアリスム精神の具現化たるナジャという存在は最初からなく、全てはブルトンの幻想にすぎなかったという解釈も成り立つことになるのである。

第七章 ブルトンは何を望んでいたのか

ラカンの言う「想像界」は何かと言うと、「現実界」として捉えられるものと言葉によって表現できたものが「象徴界」であるとするなら、言葉によって表現し切れていないイメージのようなものとして捉えることができるだろう。『ナジャ』においてブルトンの欲望がナジャに反映される形で現われてきていたとしても、そこには表現し切れていないブルトンの欲望があるはずなのである。それについて考えるために『ナジャ』においてブルトンが望んでいることとして書いているにも拘らず、『ナジャ』においてその答えが明確には示されていないと思われる箇所を見つけ出す必要があるだろう。もっともそれは簡単に見出せるのであって、それは『ナジャ』の本編の冒頭の部分にある、このまさに最初は「私とは誰か。」(PI p.647) という問いかけで始まる。そしてそれに対する答えを見出すための方法として、誰が友達であるかを言えばそれがわかるという内容の諺を提示するのだ。つまり「私」は「私」として最初から確固たる存在としてあるのではなく、例えば誰それのようになりたいたいとか、これで有名になりたいとかいった形で示される。これは既に指摘したように、他者の欲望に合致したつまり望ましい対他存在を手に入れるということなのである。ブルトンの場合、そのような想像的同一化ではなく自らの中にある自分らしさといったものを見出すことの出来る象徴的立場に立ちたいという象徴的同一化のように思われる。具体的にブルトンは「私とは誰か」といった問いかけについて議論を進めた最後の段階で次のように書くのである。「重要なことは私がこの世でゆっくりと私の中に見て取る特殊な適性というものは、私に固有のものだろうが私には与えられていない、全般的な適性の探求から私の気をそらせることは何もないだろうということだ。私が自分の中に認める好み、私が自分に感じる親和力、私が甘受している誘惑、私に起こり私にしか起こらない出来事、あらゆるそのようなものの向こうに、私が引き起こしているのを見る動き、私だけが体験する感情、多くのそのようなものの向こうに、他の人たちと比べて、私の分化が何に起因するのかではないにしても、何に存するのか知ろうと努めている。他のあらゆる人たちの中であって私は何をしにこの世界にやってきたのかそして私自身でしかその運命に応えることができないくらい私はどんな唯一の伝言の使者であるのかがわかるのは私がこの分化を意

識する正確な程度によるのではないか。」(PI p.648)

これについて明確な答えが『ナジャ』のテキストの中において見出せるわけではないのだが、少なくとも望まれるのはそれを見出すことのできる方法がいかなるものであるかその一端でも知ることができなければならない。そしてそれは既に明らかとなっているのであって、我々が第二部において指摘したように、自分が大文字の他者の立場と同一化するという象徴的同一化である。当初考えられていた関係を図式的に説明するなら、シュルレアリスムを探求するブルトンがまさにシュルレアリスム精神の具現化と思われるナジャと出会い、秘められたものを解明していこうとする。しかし力及ばずというところで、ナジャを見失ってしまうというものである。ナジャの物語の最後においてあたかもナジャが消え去ったかのような表現も、そのあたりの事情を説明する形になっている。ところが真相はというと、ナジャはもともとシュルレアリスム精神の具現化されたものではなく、そのことについてブルトンは自覚的であったのだ。ナジャがシュルレアリスム精神の具現化であるかのように思われたのは、ナジャ自身が先回りしてブルトンの欲望を読み取って演技していたからであるし、もとはと言えばブルトンの幻想がそうさせたと言えるのである。ブルトンがナジャと何回か会ううちに、ナジャのあまり見たくはない面に直面せざるを得なくなる。ここから別れが必然的に導き出されるのであるが、このあたりの事情は『ナジャ』のテキストにおいても明らかにされているのである。ブルトンは次のように書いているのだ。「私がどれ程欲望を抱いたにせよ、また恐らくは幻想を抱いたにせよ、私は恐らく彼女が私に提示していたものと同じところにはいなかったのだ。しかし彼女は私に何を提示していたのか。それはどうでもいい。」(PI p.736)

ナジャがシュルレアリスム精神の具現化でも何でもなかったという事実に驚くのもなくうろたえるのもなく、そんなことは既に承知していたといったところである。求めるものが何かありそうではあるが、何かわからないまま探求を続けるというのなら、その対象とはまさにラカンの言う対象aになるのであるが、そこには既に何も無いということがわかっている場合そこにある空白を埋めるのは探求する側の幻想に他ならないわけであるし、それを自己欺瞞的に行なうのではなく、まさに自らの欲望に突き動かされて行なうためには、探求している自分を見る大文字の他者に自分自身が同一化していなければならない。ここに示されている構造はラカンの言う宮廷恋愛の逆説と同じものである。つまり貴婦人は確かに現実に存在する実体なのであるが、あくまで見せかけにすぎない。恋愛の対象である限りは誠意を尽くせば愛は成就するというものではなく、従って欲望が直接的に向かうわけではない。それでは貴婦人に対する愛は結局のところ全ては無駄になるのかと言えばそうではなく、このことによって欲望が維持され現実のものとなるのである。そしてこのことについて当事者は自覚的でなければならない。愛が成就しないからといって、裏切りだとか不実だとか責め立てることはないのである。この時貴婦人に愛を捧げる騎士は愛が成就した状態を夢見るのではなく、今こうして不可能な愛に身を焦がしている自分を好ましく思っているのである。つまり、ある地点から見れば貴婦人に愛を捧げている状態がまさに欲望の發揮されている状態であるということで、肯定的に捉えられるまさにその地点への象徴的同一化である。このように理解すれば、ナジャの物語の最後においてブルトンがナジャの不在を指摘しそこに詭弁があることを認めていることも理解さ

れるだろう。ブルトンは次のように書いているのだ。「最も異論の余地のない真実よりもこの上なく意義深く影響力に満ちた詭弁がある。詭弁だからということでそれらを取り消すことは同時に権勢と利益を失うことでもある。それが詭弁だったとしても、私自身に、私自身に会いに最も遠くからやって来ている人に、相変わず悲壮な、〈誰か〉という叫びを投げかけることができたことで私が負っているのは少なくともそれらなのである。誰か。あなたなのか、ナジャ。彼岸（下線原文）、彼岸の全てがこの世にあるというのは本当なのか。私はあなたの声が聞こえない。誰か。私だけなのか。これは私自身なのか。」(PI p.741, p.743)

ナジャと呼ばれている女性は現実には存在するわけで、その意味でまさに実体である。しかしナジャがシュルレアリスム精神の具現化された存在というわけではない。従ってそこにシュルレアリスムの何たるか本質を見出そうとしても無駄である。それにも拘らず、ナジャを対象として捉えることに意味があるのは、シュルレアリスムの探求という欲望を可能にし維持させるからである。そして更に重要であるのは、シュルレアリスムの探求をしている自分を捉える大文字の他者と象徴的に同一化するという視点を得たことである。それはどのようにして可能になったかと言えば、『ナジャ』を書くことによってである。『ナジャ』について書いている「私」がいると言えることである。ここで重要であるのは、『ナジャ』が単なる空想の産物ではなく、ナジャという女性は確かにいるということが一つの根拠になっているということである。そしてそのナジャに対してブルトンは自らの幻想を付与するのであるが、それも全く根拠のないものではない。何故ならそれはブルトンの欲望に基づいているからであり、精神分析的にはそれもまた実体なのである。このように実体＝根拠に基づいて大文字の他者の視点から自分自身を眺めるという作業を続けるならば、ブルトンの希望している自らの分化も徐々に明らかになるに違いない。仮にそれ程明らかにならないとしても、ブルトン自身不満に思うことはないのではないか。何故なら、大文字の他者と象徴的に同一化すること自体が欲望の充足に繋がると考えられるからである。それではこの大文字の他者とはブルトンにとってどのような存在どのような象徴として捉えられるのであろうか。

第八章 ブルトンは結局どのような言葉を見出したのか

ブルトンは『ナジャ』の最後の部分においてヘーゲルを引用し、そこから次のような結論的言葉を引き出している。「ある態度がそこから美に関して必然的に生じる。」(PI p.752)

このあまりにも唐突な展開に対して、我々はどのように理解すべきであるのか。マルグリット・ボネはボードレールやマチスに言及することで、ブルトンの美に対する態度を説明しているのだが(PI p.1562)、我々はここでこの論考の目的でもあるラカンを持ち出してくることにしよう。例えば我々がある風景を眺めて、それを美しいと感じたとしよう。それはただ単にきれいだなと思うにすぎないといった程度のものではなく、まさに荘厳であるといった趣きである場合、これはまさにブルトンが『対話集』において述べているように、つまり「私は私の著作である『狂気的愛』において、バス＝アルプの素晴らしい地形の思い出に、〈至高点〉と名付けるでしょう」(PIII p.525)と語るに至る程の景観を目の前にした時、我々はそれを美しいと思うと同時に大文字の他者もこれを美しいと認めるに違いないと思う。つまりこの美しい景

観を見ているのは我々だけではなく、大文字の他者もそうなのであり、ここにおいて我々は
大文字の他者と象徴的に同一化しているわけである。この象徴的同一化を表わす言葉がテキスト
の中に示されているかと言えば、既に指摘した「美に関するある態度」がそれに当たるだろう。
つまり「私」がそう思うだけではなく、大文字の他者の視点に立つということであり、これは
美というものが措定されたことによってその対極に自動的に設定されるものである。要するに
ブルトンが『ナジャ』の最後において美と記すことは、自らこの大文字の他者の視点を手に入
れていることを意味するのである。別の言い方をするなら、何らかの至高の価値を問題にする
時、自分は思うのかとか他の誰かが思うのかだけではなく、例えば神のような超越的な存在
を考え、神ならどう思うかといった思考に入るだろうが、まさにそのような視点なのである。
もっともそのような場合でも、結局のところ多くの人たちの総意にすぎないといったものかも
しれない。ブルトンの場合は数多くの人たちの総意とは別の視点を設定するのだ。この意味に
おいて捉えるなら、ブルトンが『ナジャ』のテキストにおいて示している言葉とは、ブルトン
がナジャに対して与えることになる「シュルレアリスムの渴望の限界、その最強の極限理念（下
線原文）」(PI p.690) かもしれない。これは『ナジャ』のテキストではなく『ナジャ』執筆以
後の1930年に刊行された『シュルレアリスム第二宣言』を見ればわかりやすいだろう。ここで
ブルトンはシュルレアリスムについて次のように説明しているのだ。「そこからは生と死、現
実と想像の産物、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高い所と低い所とが矛盾
して知覚されるのをやめる精神のある一点が存在すると信じざるを得ない。ところで、この点
の確定といった希望以外の動機をシュルレアリスム活動に探すことは無駄である。」(PI p.781)

この精神の一点こそ大文字の他者の視点であると言えるわけだが、理論的には理解できても
現実において具体的にどのようにすればそのような視点を得る、もしくはその視点に同一化で
きるのだろうか。我々がここで問題にしているのは、他の人たちはこう思うかもしれないし、
実際そうなのだが、自分はそうではないと言い切れる根拠をどこに求めるのかということなの
である。このとりあえず一つの方策としては、他者の欲望に依存しないということがある。つ
まり自分の欲望は結局のところ他者の欲望であるという想像的同一化を遮断することである。
そしてその上である地点から見れば好ましく思われるその地点と同一化するのであるが、その
地点とは具体的に何なのか。それは例えば大文字の他者と表現されるようにシニフィエなきシ
ニフィアンなのである。従って我々がその地点から自分自身を眺めるにしても、そこで与えら
れるものは同じようにシニフィエなきシニフィアンにすぎないのである。これは『ナジャ』の
テキストにおいて何かあったかのような気にはなりつつも、結局のところよくわからずにナ
ジャについて口にするのと同様である。我々は結局のところ何を欲しているのか。これはブル
トンが『ナジャ』の冒頭において投げかけた「私とは誰か」(PI p.647) という問いと同じこと
である。これに対する答え、更にはブルトンが問題にしている「私の分化」(PI p.648) につい
ての答えも同様であるが、ブルトンは『ナジャ』のテキスト中において明確に記してはいない。
それはむしろ当然というか答えられないものであるからだが、それでも充分であるのはブルト
ンが大文字の他者の視点を手に行っているからに他ならない。それはブルトンにとって「シュル
レアリスム」という言葉なのである。つまりシュルレアリスムから見ればとか、シュルレアリ

スムーズに考えるならばということで、恐らく全ては肯定されるのである。自らの欲望は何か、それを他者の欲望に置き換えるのではなく、かといってその時点では自分の欲望についてこれこれであると答えられるわけでもなく、まさに空白の状態にあるわけだが、それを埋めるのがシュルレアリスムなのである。あるいは『ナジャ』に関して言うなら、シュルレアリスム＝ナジャとしても機能するだろう。つまりナジャの目で見ればというわけである。もっとも既に指摘したように、ナジャはシュルレアリスム精神の具現化された存在ではなく、ブルトンの欲望を先読みし演じていた存在として捉えられるわけであるから、ナジャの目を通してということは、結局のところブルトン＝シュルレアリスムの観点ということになるわけである。確かにシュルレアリスム的にはとかシュルレアリスムにおいてはと言われると、大してわかっていなくても何かわかったような気になるという意味で我々は納得することができる、少なくとも納得したような気になるという心理的效果は期待できるわけだ。この心理的效果というものは何も自己欺瞞的なものではなく、例えば精神分析はヒステリーの症候の解釈から始まったと言えるのであるが、ヒステリーの女性患者の場合、彼女にとって大文字の他者である父親の期待に応えることができないという苛立ちがヒステリーの症候を起こすということを考えるならば、わかったような気になるという心理的效果は絶大なものがあると言えるだろう。シュルレアリスムという言葉がこのような心理的效果をもたらすとなれば、次の問題として出てくるのは、シュルレアリスムとは何かということである。敢えて先に言ってしまえば、シュルレアリスムという言葉が心理的效果をもたらすということが明らかになった以上、シュルレアリスムとは何かについて大急ぎで解明する必要はあるまい。既に答えは得たようなものだからである。しかしこの問題を解明していくことについては努力を怠ってはならない。だからこそブルトンは『ナジャ』のナジャの物語以後の思索的部分において次のように書くのである。「私の説得力のある行為のみを私に起こさせる生き生きとしてよく響く大いなる無意識が永久に私である全てを自由にせんことを。私はここにおいて新たに私がそれに与えているものをそれから取り戻すあらゆる機会をわけもなく自分から取り除く。私はもう一度それしか認めたくはないし、それしか当てにしたいはないし、私の目の中では私がそれであることができて夜の小柄にぶつかるのを私に免れさせてくれる光る点を私自身凝視しながら、巨大な防波堤をほとんど心ゆくまで走り回りたいと思う。」(PI p.749)

シュルレアリスムとは何かについて無意識を探求していくことだという方法が提示されたわけであるが、ここにおいて今度は無意識とは何かという問題が措定されることになる。こうした事態は必然的であって、シニフィエなきシニフィアンが次々に送り渡されているにすぎないのである。このようなシニフィエなきシニフィアンの譲渡を止めることができないのは、それが言葉であるからで、我々はそのこと自体は諒解済みなのである。従って我々は既に手に入れた言葉を手掛かりにしてシュルレアリスムの探求に従事していけばいいのである。しかし我々はそれでも留意しておかなければならないことがある。シュルレアリスムという言葉でもって我々の欲望は全て覆い尽くされているのであろうか。まだ残っているものがあるのではないかという問題である。

第九章 「現実界」と対象a

シュルレアリスムという名前に昇華することのできない蠢いていて直視したくない「現実界」ということになれば、『ナジャ』においてはまさにナジャそのものということになるだろう。初めのうちは毎日会っていて、会う約束をしていない時など「しかしながら、午前中ずっと、私はナジャが恋しかったし、今日彼女と会う約束をしていなかったことを自らとがめた。」(PI p.701)と書く程であるのに、ブルトンがナジャに対して距離を置き始めたあたりでは次のように書いているのだ。「ある日、ツインマーのビヤホールの一室で、血を噴出させた顔の真ん中への拳骨の一撃の話は(中略)10月13日午後の初めに、彼女が私にそれを理由なく語った時、永久に彼女から離れるところだった。私にはどういう感情なのか分からないがこのひどい偶発事件の嘲笑的な話が私に感じさせたのは絶対的に取り返しがつかないというものだった。(中略)確かに今私をひどく悲しませていることを私に隠さなかったことについて私は彼女を全く恨んでいないし、むしろそのことについては彼女に感謝しているが彼女がかつてそこまで行くことがあり得たということ、将来、誰が知ろう、そういう日々がまた彼女に対して恐らくは現われるということ、私はそれを直視する勇気を自分自身感じなかったのだ。」(PI p.718)

距離を置いて見ている間は好ましい存在であるのに、直視するようになっておぞましいくらい気持ちになってしまうのである。確かにブルトンはナジャについて言葉でもって表現することによって『ナジャ』を書き上げたわけであるから、「現実界」から「象徴界」への移行も説明がつくように思われる。ただ奇妙なことのよう思われるのは、『ナジャ』においてナジャの物語が終わった後あたかもナジャは存在しないかようになってしまうことである。つまり拒否しつつも離れることのできない存在であるべきで、そこからまた言葉が生まれてくるという構図になるはずなのである。そこで我々は若干考えを変え、ナジャにも当然認められるのであるが、ブルトンが固執している身体のある部分に注目した。それは「眼」である。つまり『ナジャ』において眼は対象aとして機能しているのである。『ナジャ』においてはナジャの物語が始まる前段階のシュルレアリスムの挿話のある部分で、既に指摘したソランジュの出てくる芝居について言及されているが、彼女についての描写の中には「光り輝く眼、そこには悩ましき、絶望、繊細さ、残酷さがある。」(PI p.670)というものがある。ただこの部分はさほど特徴的ではないかもしれない。やはり眼に特徴的な記述が始まるのは、ナジャの物語が始まってからである。10月4日にブルトンはナジャに初めて出会うわけであるが、その際注目しているのはナジャの眼なのである。「奇妙な化粧をしていて、眼から始めたけれど、終える時間がなかった誰かのようにだが、金髪の女性にしてはかなり黒い眼の縁である。(中略)私は今までこんな眼を見たことがなかった。」(PI p.683)ブルトンはナジャと話を始めるのであるが、再度眼に注目するのである。「この眼の中にはかくも異常な何かが通り過ぎることがあるのか。漠然と苦悩と同時に明快に傲慢な何かがそこに自分の姿を映すのか。」(PI p.685)

この後日付は限定できないのだが、10月13日以降の記述において、ブルトンはナジャの眼を羊歯の眼として表現するのだ。「巨大な希望の羽ばたきが恐怖のそれである他の物音とほとんど区別がつかない世界で朝私は彼女の羊歯の眼が開くのを見たことがあったし、この世界では、私は眼が閉じるのしかまだ見たことがなかったのだ。」(PI p.714, p.716)

この「羊齒の眼」についてはこのような記述だけではなく、写真も挿入されているのだ (PI p.715)。ここに至って彼女の眼は単なる興味の対象ではなく、希望と恐怖のない交ぜになったものとして提示されることになる。つまり最早容易に捉えられるものではなくてきているのである。この後実質的にナジャとは別れることになるのであるから、このナジャの眼も現前したものではなくなるわけであるが、ナジャの物語が終わった後ブルトンはナジャの物語が辿っていくことになる場所を見直すことになるのであるが、この中でテキストの中には現われてきていないが、グレヴァン蠟人形館の記述があるのだ。「そしてとりわけ、この本では別に問題にはなっていなかったけれども主としてそれに固執していたのだが、素晴らしい見せかけを写真に撮る許可を得られなかったことであり、それはグレヴァン蠟人形館で、靴下留めを留めるために物影に隠れる振りをするこの女性であり、その変わることのない姿勢には、私の知る限り眼 (下線原文)、挑発のまさに眼を持った唯一の人形なのである。」 (PI p.746, p.748)

この部分がブルトン自身にとっても重要であると思われるのは、この「眼」について原文においてはイタリック体になっていて強調されているということ、またこのテキストにおいては掲載許可が得られなかったという風に書かれているのだが、1962年版においては1959年においてパブロ・ヴォルタによって撮影されたこの蠟人形の写真が掲載されているからである。ナジャはたまたまブルトンの関心を引く眼の持ち主だったということであり、ブルトンの関心は眼にあるということを考えれば、ナジャが眼前された存在でなくなった後も眼に対する、正確には女性の眼に対する関心は持ち続けているということなのである。この眼が何故対象aとして機能するのか。ブルトンが女性の眼に関心を持ち対象として捉えようとしても、その眼は主観的存在であることを止めないからである。つまりブルトンもまたその眼によって見られる存在となることを免れ得ないのである。このことはラカンが自ら体験した挿話としての海に浮かんでいた缶を連想させるだろう。ラカンは以前若い頃にブルターニュの海岸で小舟に乗っていたのだが、ある時海に浮かぶ一個の缶を見つめていたところ、同乗している漁師に缶の方はあんたのことは見ていないと言われ、いやそれでも缶は自分を見ていたのだと証言している。ましてや『ナジャ』においてはただの物としての缶ではなく眼なのであるから、ブルトンは明らかに見られる存在ともなっているのである。そしてここにおいてブルトンは対象aを捉えようとしつつも、必ずやその試みに失敗することになる。つまりブルトンを見ているという主観をどうしても掴み切れないからだ。ところがここにおいてある種の逆転、更なる発展が生じることになる。つまり相手の主観に映し出されているものは「私」の「対他存在」に他ならないわけであるが、既に指摘したように、他者によって作られた対他存在に同一化しようとする想像的同一化は否定されているのである。「私」は「私」なのであって、対他存在に振り回されるわけではないということである。つまり想像的同一化ではなく大文字の他者の視点に立つという象徴的同一化によって「私」は他者の欲望の何たるかを既に知ってしまったのである。もちろんここにおいて全てが解明されたというわけではなく、あくまで出発点に立ったということにすぎない。つまり「私」を見ているのは現前している他者、例えばナジャの眼ではなく大文字の他者の眼なのである。そしてその大文字の他者の視点に「私」は象徴的に同一化しているわけであるから、「私」は「私」の主観を存分に機能させればよいわけである。ブルトンが『ナ

ジャ』の「序言」において主観性と客観性の問題に言及しているが、それはこの点から解釈すべきであろう。つまり我々は他者の欲望に合致することによって自らの対他存在を好ましいものにしようとする。そうすることによって自らを肯定するわけである。しかしそこでは「私」の欲望は失われている。「私」が正しいかどうかではなく、他者の眼を気にせずに生きたい。このように考えるならば、本来なら他者の理解を前提にすべきものであるにも拘らず、ブルトンは主観性にとっての最大の幸福として次のように提示するのである。つまり「もう一方の主観性の最大の幸福——私にとって更に重要であり続ける——は間違いだらけの恋文や〈正しい綴りではない恋愛の本〉の中にある」(PI p.646)

第十章 現実としてのバリ

我々はこの論考において第一章では論点を明確にせず軽く触れるに留まっていたが、ここにおいて指摘しておく問題に取り組むことになる。それはブルトンにとってのバリという存在である。そもそも『ナジャ』の前提としての「新精神」が出発点として考えられるのは、実際に謎の女性がいたという事実なのである。確かに話しかけたとかその女性がどこの誰であるかが明確になったというわけではないのだが、それでも尚確かであるのはブルトンにとって謎の女性として捉えられる女性が現実にはいたという、自らの欲望を実現させる事実なのである。シュルレアリスムにとって出発点となるのは、想像力を働かせて幻想を持つということではなく、現実の中に見られるずれなのである。その中でシュルレアリスム的と形容し得るような様々な体験をブルトンはするわけであり、『ナジャ』においてナジャの物語が始まる前段階で書かれている挿話もその存在を明らかにしているわけである。その中で最たるものがナジャとの出会いであったわけであるが、その原型は既に「新精神」の中にあったのである。そしてともすればその謎の女性がいたということで、その女性の存在にばかり我々は目を奪われてしまうわけであるが、ちょっと見方を変えてみるなら、その謎の女性はバリで出会ったということなのである。「新精神」においてブルトンたちが謎の女性に出会ったということで、その場所を示すために使われている目印となる所はボナパルト通り、カフェ〈ドゥ・マゴ〉、ジャコブ通り、サン・ジェルマン・デ・プレということであり、実際アラゴンとブルトンが探し回ったという場所は6区という風に明記されている。「新精神」として書かれた小文はここで終わっているのであるが、我々が当然の如く想像し得るのは、この後も何かの機会を見つけてブルトンたちはこの地区を歩いていたのではないかということだ。またその謎の女性に出会うのではないかということだ。我々が読むことのできるテキストにおいてそのような後日談は明らかになっていないため、謎の女性に再会したということはないかと思われるが、「新精神」の中の女性ではなくてもブルトンにとって謎の女性の位置を占める女性との出会いは当然予期されていたに違いない。例えば『ナジャ』においてナジャの物語の前段階においてシュルレアリスムの体験が語られる中で次のように書かれている箇所は、目的が明らかになっていないだけ尚更そのように感じられるのである。つまりブルトンは次のように書いているのである。「人は、さしあたり、パリ市内で私に出会うこと、午後の終わり頃、ボンヌヌヴェル大通りの『マタン』誌の印刷所とストラスブール大通りの間で、私が行き来しているのを見ずに3日以上過

ごすことはないというのは確信していい。私は何故そこなのかわからないが、私の足が向いてしまうのが、決まった目的もなしに、この漠然とした資料、つまりそれ (?) (下線原文) が生じるだろうというのがそこなのだとすることを決定付ける何もなしに、ほとんどいつも赴くのが、実際のところ、そこなのである。私は、この素早い道のりで、まさに私の知らないうちに、空間的でもなく時間的でもなく、私にとって魅力の極地を構成し得るだろうものが、ほとんどわからないのだ。」(PI p.661, p.663)

ちなみにここで出てきている『マタン』誌の印刷所であるが、ボワソニエール大通りとフォブールーボワソニエール通りの角にある (PI p.1532)。ブルトンがナジャと初めて出会ったのはマジャンタ大通りから少し南の方にある教会の近くということで距離的にはそれ程離れてはいないのだが、すぐ近くというわけではない。むしろ10月4日に初めて出会った後、二人は別に目的もないままフォブールーボワソニエール通りのところまでやって来ているし、10月5日ナジャはブルトンと別れた後ラファイエット通りとフォブールーボワソニエールの方に行こうとするのだ。従って距離的にはこちらの方が近いだろう。またパリに何かがあると思われるような記述についてマルグリット・ボネは観光名所的な場所ではなく、サン・ドニ門とかサン・ジャック塔のような神秘的な場所があるからだ指摘している (PI p.1532)。確かにブルトンがナジャとともにパリのあちこちに出かけて行く際にも、第一章において指摘したように、それぞれの場所において奇妙でありかつ神秘的な体験をすることになる。そして最も不思議と言える体験こそナジャと出会ったことであり、パリはそのような体験が可能になる場所であったのだ。そのことについてブルトンは自覚的であって、そもそも10月4日にブルトンがナジャと会う直前について書かれた箇所もそれについて示唆的である。つまりそれはまさにナジャの物語の冒頭の箇所であるわけだが、ここに書かれている「秘訣」であるが、パリを歩いていれば何か不思議な体験をすることが出来る、例えば謎の女性に出会おうといったようなことである。そして1926年の10月4日に出会ったのがたまたまナジャであったということである。従ってブルトンにしてみればパリを歩いていればまた謎の女性に出会えるかもしれないということであり、ナジャが唯一の女性というわけではないのだ。このことは次のような箇所にも窺われるだろう。「私がヴェルサイユからパリへの街道で自動車を運転していたある晩、私の隣にいた女性はナジャであったが、他のあらゆる女性でもあり得たわけだし、そうじゃないか、他のある女性 (下線原文) でさえあり得たのだ」(PI p.748) と書いているのである。つまりブルトンにとっては謎の女性そのものではなく謎の女性に出会えるパリがアルキエも『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように「パリの楽園」(PS p.20) なのである。ブルトンは「人生は暗号文のように解読されることを求めるのかもしれない。」(PI p.716) と書いた上で、「罫の楽園があるこの種の旅行のように精神の最大の冒険を構想することは許されているのだ。」(PI p.716) とするのである。このように考えるならば、ブルトンがナジャについて「誰が本当のナジャなのか」(PI p.716) と考える上においていくつかのナジャのあり様を提示するのであるが、その中の一つに「彼女にとっては唯一の価値ある経験の場である、街中で、大いなるキマイラに投げかけられた全ての人間の質問の手の届く所である、街中にいることだけを好んでいた常に靈感を受けまた靈感を与えている女性」(PI p.716) というのがあり、その女性を男性

に変えればそれがそのままブルトンを表わすということになるであろう。あるいはもっと直接的な表現を探してみるなら、ブルトンがナントについて述べている箇所である。「ナント、恐らくパリとともにその労力に値する何かが私に起こり得るような気がするフランスの唯一の都市」(PI p.658)。

これは逆に読んでいくなら、ブルトンにとってナントを除いてはパリこそがそのような街であるということである。だからこそブルトンがナジャとの関係を終わりにしようとした時、気分転換と称してパリからサン＝ジェルマンへの旅行を提案するのである。そしてナジャとの関係が終わってしまった後、ブルトンは『ナジャ』を執筆するに当たって、この物語が辿った場所をもう一度見直すことにするのだが、その際再び謎の女性が現われるということはない。それよりもむしろパリ以外の場所において、ブルトンにとっての楽園が現われるのである。これは『ナジャ』においてナジャの物語が終わった後の反省的な部分でこのナジャの物語を書かしたとも思われる「君」と称している女性の存在があるからである。マルグリット・ボネの研究によれば(PI pp.1506-1507)、ブルトンは『ナジャ』の執筆に当たってヴァランジュヴィルに滞在していたわけであるが、その時エマニュエル・ベルル夫人と出会うことになる。このエマニュエル・ベルルという人の愛人がシュザンヌ・ミュザールで、彼女とブルトンは最初に出会ってからお互いに引かれあうのである。彼らはすぐさまパリを離れ、1927年の11月20日にはアヴィニオンに、25日にはトゥーロンに滞在するのである。もっとも経済的な問題もあって二人はパリに戻ってくるわけであり、この頃がちょうど『ナジャ』の最後の部分を書いていた12月の末になる。パリに戻ってきてからすぐ、12月にベルルはシュザンヌ・ミュザールを連れてコルシカ島に出かけるのであるが、この時のリヨン駅での様子が『ナジャ』のテキストの中にも「リヨン (下線原文) の駅で絶えず飛び跳ねている列車」(PI p.753)として表現されている。現実にはその列車は出発することが出来るのであるが、ブルトンの気持ちの中にあっては決して出発することがないものとして思い描かれるのである。このような事情があり、つまりブルトンにとっては全て順調というわけでもないのであるが、少なくとも愛することの出来るシュザンヌ・ミュザールと南フランスですごした体験から最早期待すべき体験はパリに限定されることなく既に広がりつつあるということなのである。だからこそブルトンは次のように書くのである。「〈ある街の形〉、私の思考において空気が生命に対してあるようなものだろう基本要素の力によって私が住んでいる街から引き離され抽象された本当の街でさえどうなっているかについて考察することになるのは私ではない。何の後悔の念もなく、この時間に私はそれが別のものになり逃げ去っているのさえ見える。それは次第に移っていく、それは身を焦がす、それはバリケードのはびこった雑草の身震いの中に、男と女が一樣に愛し合い続けるだろう部屋のカーテンの夢の中に沈む。その限界線は私を落胆させるが、アヴィニオンの方へのその驚くべき延長にも拘らず、私はこの精神的風景を下絵の状態に残しておくのだ、アヴィニオンでは教皇の宮殿が冬の晩や土砂降りの雨に辟易していたし、古い橋がついに子供の歌に負けていたし、不可思議で裏切ることのない手がまだそう時間的に経っていない頃にこれらの言葉、《黎明》と書いた空色の広大な標識板を私に指し示したのだった。私が有限 (下線原文) のまさに真ん中に星を打ち込むのに役立つ、この延長そして他の全ての延長にも拘らずにだ。」(PI p.749)

つまりそれまでは「新精神」に出てきた謎の女性とパリで出会ったという体験から、パリを散策していればいずれまた当の本人ではないにしても謎の女性と呼ぶに値する女性に出会えるに違いないということから、パリにすることがまず第一の条件として考えられていたわけであるが、シュザンヌ・ミュザールと出会い、南仏ですごした体験から、彼女とともにいる場所が即ブルトンにとっているべき場所として捉えられるようになったのである。アヴィニョンという実在する地名も二人がすごした場所であることから、具体的に書かれることになったのであるが、だからといってアヴィニョンがこれまでのパリに取って代わるというわけではない。だからアヴィニョンならアヴィニョンも特別な場所として提示されるのではなく、たまたま二人がすごした場所としてそのままにしておこうということなのだ。それでもパリは以前と変わることなく存在し続けるかという、そういうことはない。確かにパリはブルトンにとって特別な意味を持つ場所であり、いつかまた謎の女性に出会える可能性に満ちた場所であることには変わりないのであるが、最早パリはパリとして閉じられた空間ではなく、パリ以外の土地、例えば南仏なら南仏に出かけていくための始発駅のある場所としての意味合いも持ち始めているのである。ブルトンが『ナジャ』という本を「ばたばたする扉のように出入り自由に」(PI p.751)することを望んでいる以上、パリという街も「ばたばたする扉のように出入り自由に」することを運命付けられているのである。どのように変化するかもわからないし、どのように変化させたいと思っているのかもブルトンにはわからない。いずれにしてもシュザンヌ・ミュザールとの件があってから、ブルトンにとってパリは変化してしまったのだ。ここにおいて我々はナジャについての物語である『ナジャ』を対象にしてきたはずなのであるが、気がつくとパリという街について考察してしまっている。実際ブルトンはこの物語が辿った場所を見直した後、次のように書くのだ。「しかし外的世界というのは、そうじゃないか、この馬鹿げた話というのはこういう風になるのだ。」(PI p.748)

このナジャからパリという街への対象の変化は何を意味しているのか。あるいは再び謎の女性と出会えることを期待してパリを散策しようということであったかもしれない。いずれにせよパリはブルトンにとっても我々にとっても同様に現実の存在としてあるのだ。従って対象aとも言うべきナジャの存在を見失うこととなり、「現実界」のおぞましさを直視することによって、それを覆い隠してくれる存在として「現実界」ではなくまさに現実が必要だったのである。「現実界」を捉えることが遅かれ早かれ失敗することが運命付けられているとするなら、まさに捉えそこなった現実を決してそう悪くもないものとして現前させておくことが、見たくもない「現実界」を遠ざけておく唯一の有効な方法として考えられるというわけである。

終章

ラカンが、自分を王だと思っている狂人は自分を王だと思っている王以上に狂っているわけではないと言う時、王が王であるのは王以外の人たち、例えば臣下が王を王として扱うためである。つまり現実における存在とは他者にどのように扱われるかということによって決まるのである。しかしここには明らかな矛盾を孕んでいる。仮に本当の王に対して「あなたは王ではない」と言う者がいたらどうなるのだろう。この場合王としての資格がないとか王らしくない

ということであるならば理解できる。ところが存在そのものについての言及とした場合どうなるのか。そもそも王の本質的属性というものがあるわけではないのだから、物質の実体以外のものは全て幻想であるという言い方もできるかもしれない。そのためナジャと呼ばれる女性は確かにいたのだが、その女性をいわゆるナジャとして、つまりシュルレアリスム精神の具現化された存在として捉えるのは、あくまでブルトンの幻想が付与されたからであるということになる。それはそうなのだが、それではどのような女性に対してもブルトンはその幻想を付与することができるかというそうではなく、ブルトンの思いのままにナジャが出来上がるわけではないのだ。ブルトンは『ナジャ』のテキストにおいて自由とか人間の解放とかに言及しながら「ナジャはそれに仕えるために作られていたのだ、たとえ想像力の中にしか存在しない非常に個人的な陰謀を各個人の周囲にかもし出すに違いないことを証明するだけだとしてもである。」(PI p.741)と書いている。それとともに問題になるのは、ブルトンがナジャにその幻想を付与した時、ナジャもまたその幻想に応えるのでなければならないということである。いわばコミュニケーションが成立しなければ、幻想はそれとして機能しないのである。その観点から見れば、『ナジャ』のテキストにおいてブルトンとナジャのコミュニケーションが成立していることが見て取れる。それは10月4日の最初の出会からそうなのである。「ためらうことなく私は見知らぬ女性に話しかけるが、期待しながらも、私は最悪の場合、他の人にすることを決めている。彼女は微笑む、しかし非常に神秘的で、そして、何と言うか、その時私は何も信じることができないけれども、動機の認識において（下線原文）のようなものだ。」(PI p.685)

その後ブルトンとナジャはお互いの話をするのであるが、別れ際の会話も見事なコミュニケーションの成立である。「まさに立ち去るところで、私は他の全てを要約する問い、尋ねるのは恐らく私しかないが、少なくとも一度は、それに見合った答えを見出した問い、つまり〈あなたは誰か〉を彼女に提示したいと思う。そして彼女は、ためらうことなく、〈私はさまよえる魂なの。〉」(PI p.688)

そして事態は更に進展し、ナジャは過剰な程の適応ぶりを見せることになる。「彼女は今彼女に対する私の力、私が望んでいること、恐らくは私が望んでいると思っている以上のことを、彼女に考え実行させるために私が持っている能力について私に話す。彼女は、こうすることで、彼女を全く侵害しないよう私に嘆願する。彼女は私を知るかなり前から、私に対して一度も秘密を持ったことがなかったと彼女には思われる。」(PI p.693)

このあたりまでなら単なる恋愛関係の相性の良さに留まるかと思われるが、10月12日までの日記形式以後のいささか距離を置き始めた部分においては、明らかにシュルレアリスムの次元にまで到達していることがわかる。つまりブルトンは次のように書いているのだ。「私は最初の日から最後の日まで、ナジャを自由な天才、ある魔法の実践が一時的になつかせることはできるが、服従することは問題にならない、この風の精の一つのようなものとして捉えた。彼女はというと、私は彼女が語の真の意味において私を神として捉え、私が太陽であった（下線原文）と信じるに至ったと知っている。」(PI p.714)

ところがブルトンとナジャとの関係が怪しくなってきた、ブルトンがナジャに対して距離を置こうとした時などは次のような状態であるのだ。「しかしある日々彼女は、私の言葉に少し

も注意を向けることなく、私の存在だけで生きているように思われたし、それに、彼女が私にどうでもいいことを話したり黙ったりしていた時、私が困っていることに少しも気付いていないように思われたので、彼女がこの種の困難を普通に解決するのを助けるために彼女に対して私が持ち得た影響力をかなり疑っている。」(PI pp.718-719)

レヴィ＝ストロースが言うように、コミュニケーションの一つには財貨の交換というものがあるのだが、このようなものであれば何かを与えればそれ相応のものが返ってくるということはある程度保証されているわけである。ところがここで問題になっているのは幻想であり、もともとは何もない空白なのである。ただ幻想ではありながら、それを共有する空間というものがあり、それはその空間を共有する人々の欲望がそのような幻想を支えているのである。裸の王様は実際は裸で何も服を着ていないにも拘らず、周囲の人たちによって素晴らしい服だと賞賛されるのは、何もその人たちが単純に騙されているというわけではなくて、裸であるのは明らかなのだが、とりあえず素晴らしい服を着ているとしておいた方が何かと好都合だという人々の欲望がそうさせているのである。しかしそのような欲望を共有しない空間にあっては、幻想がまさに幻想であることを思い知らさせることになる。従ってこの幻想を共有することは何の保証もないところでの一種の挑戦に他ならない。だからこそブルトンはナジャとの関係において見られた本質的なあり方を次のように書くのだ。「私がこの欲望を聞き入れていないと付け加えることは無駄である。私が当時どういうことになっていたか、私の知る限り、私はほとんどいつもナジャと一緒にいたことを人は知っている。愛についての共通認識がその時我々に何を約束していたのか、ひどくはっとさせるようなやり方で、私に明らかにしてくれたことについて彼女に感謝の意を表わさずにはいられない。私はあらゆる場合において (下線原文) このような誘惑に自分がだんだん抵抗できなくなっていると感じている。この最後の思い出において、ほとんど必然性を私に理解させてくれた彼女に、感謝する他何も出来ない。お互いに全てを期待し全てを気遣うことのできる非常に稀なある人々が常にお互いに認め合うのは挑戦的極限力があるからだ。」(PI p.748)

もちろんこのような事態はブルトンにとって相手がナジャであるからこそ可能になったということであって、常に幻想が受け入れられるということではないのだ。ここにおいて自覚しておくべきことは、幻想があくまで幻想にすぎないということである。その幻想に対してそれは幻想にすぎないと言って否定することは、裸の王様に対して何も着ていないと指摘することに等しいのである。幻想が駄目であるならば、実体を持ってくればそれで解決かというところではないのである。我々の欲望を掻き立てるものは幻想にすぎないとしたらどうであろうか。ラカンの大前提である「現実そのものは我々にとって捉えることができない」とするならば、我々はとりあえずの理解として幻想を持ち出してくる他ないということである。しかしここにおいて重要であるのは、幻想はあくまで幻想であるという事実¹に自覚的であることで、それを可能にするためには、我々は大文字である他者の視点に象徴的に同一化しなければならないのである。つまり「私」の欲望は他者の欲望であるとするならば、欲望を共有することは可能だろうが、他者の欲望に同一化することなく、従って対他存在を受け入れるという想像的同一化をせず、自らの欲望をそれとして提示し、他者がそれを自らの欲望とするのでない限り、「私」は

否定され、コミュニケーションが成立しないことになるのであるが、幻想はあくまで幻想であるため、他者と共有し得るという保証はなく、そこには偶然が作用するという大文字の他者の視点に立つならば、「私」の欲望は「私」の欲望として存在し続けることができるのである。このように考えるならば、ブルトンが『ナジャ』の冒頭において提示した「私とは誰か」という問いかけに対して、ブルトンがある役割を演じている他者とはまさにブルトン自身なのであって、ここにおいてブルトンは対他存在ではなく即自存在であり、「私はブルトンである」という答えを提示することができるのである。

注

引用文の後並びに文中において括弧の中に示されている略記号は、引用箇所もしくは参照箇所であり、以下の文献を示している。尚、引用文は全て筆者の訳出したものである。

(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988

(PIII) André BRETON, *Œuvres complètes III*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1999

(DS) Marcel PROUST, *Du côté de chez Swann*, folio classique, Gallimard, 1987

(PS) Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977

(EN) Jean-Paul SARTRE, *L'être et le néant*, Gallimard, 1943

尚、引用はしていないが、ラカンの精神分析理解のために、ラカン自身の著作並びにスラヴォイ・ジジェクの著作から多くを学んだ。